



特集／防災

検証・米俵事件

(昭和36年8・5水害)

水面下の白根市

ときは昭和三十六年八月五日。折から降る雨は徐々に川の水位を高めていった。そして午後六時三十分、ついに中ノ口川富月橋付近(現 風見橋付近)が越水、茶色く濁った水の固まりが白根の町へ押し寄せた。止まらぬ水の勢いに、当時の白根市長吉沢正五氏は英断。政府米を土のう代わりに使い、白根のピンチを救った。

後に美談と称されたこの事件は、米のありがたさを良く知る私たちの先人が、泣く泣く米俵を使わざるを得なかったというもので、それは、川に囲まれた白根にとって水害がいかに恐ろしいものであるかを強く裏付けた出来事とも言える。

あれから三十数年、私たちの記憶は薄れつつある。だが、水の恐ろしさは少しも変わっていない。事件を振り返りながら、改めて白根の防災について考えてみよう。

八月五日、その日は朝から雨が降り続いていた。雨は昼ごろにいったんやんだものの、午後から再び激しく降り出し、午後一時三十分、県下全域に大雨洪水注意報が発令された。そのころ、白根市の中ノ口川に架かる富月橋付近(現風見橋付近)の住民は、いつもとは違う川の流れを見つめ、不安な気持ちを抱かせていた。当時の中ノ口川堤防は現在よりも二メートルほど低く、富月橋は、見はらしや旅館と六太郎食堂の間にあり、集中豪雨で水位が上がれば、決壊の危険性を持つ木造橋だった。

午後二時、雨は一向にやむ気配もなく、むしろ勢いづいてきていた。中ノ口川の増水が激しくなり、午後三時になると、水位は五メートル六〇センチとなり、危険水位の五メートルを超え、氾濫する危険性が出てきた。このとき、付近の住民は「まさか決壊することはないだろう」と思いながらも、大事なものを二階へ運んだりしていた。

午後四時、警戒水位を突破。消防団白根分団全員が非常招集され、団本部に集結。午後四時三十分には市役所に災害対策本部が設置された。午後五時になると、中ノ口川の水量が一気に急増した。午後五時三十分、水位は六メートル五二センチ。その後も増水が予想されるため、消防団らが土のう積み作業を開始。富月橋から四の町付近の堤防沿いまでに三段ほど土のうを積んだ。

午後六時三十分、水位は七メートル五五センチに達し、ついに川は越水。最も低地帯の富月橋東側から水がひたひたと入ってきた。水の流れる勢いは増し、白根神社前の道路は濁流が渦を巻いた。

堤防決壊の恐れを知らせるサイレンが町中に響きわたった。富月橋付近の民家にも水が

押し寄せ、畳上げをしていた住民は、消防団の指示に従い家を離れた。橋から白根の町に水が駆け落ちる。消防団、地元住民ら百五十人が土のう積みをする中、新飯田、茨曾根などの各分団も現場へ駆け付けた。午後六時四十分、再びサイレンが鳴る。このとき、町には行き場のない水が溢れ、市街地の諏訪木、桜町、旭町などの低地帯の家々に水が入り込んでいた。

午後七時十分、出動を要請していた自衛隊が到着。直ちに防衛活動を始めたものの、溢れる水はどんどん急増していった。

午後七時五十分、避難命令が発令。道路は陥没し、ぬかるんで歩けない。渦を巻いて流れる水にアスファルト舗装がえぐられ、地中深く伏せてあった水道管やガス管があらわになっている。そんな恐ろしい光景の中、住民は必死でロープにつかまりながら二階の屋根づたいに避難。約三千七百人が白根中学校現教育委員会や市役所(現北越銀行白根支店)などへ向かった。

午後八時、水は堤防を越えて流れ込み、すでに一の町、二の町の道路は一メートルほど水が溜まっていた。

午後八時三十分、富月橋下流から一五〇メートルの間の堤防も水が溢れ出した。この間、消防団員や自衛隊員ら五百人余りによる必死の作業が続けられる。消防団員らが白根神社で土を麻袋に詰め、腰まで水につかりながら、土のうを運ぶ。しかし、すぐその現場に持っていきたくまに土のうの水は水で流され、半分くらいの大きさに減ってしまう。そんな作業が幾度となく繰り返された。

「これではだめだ」。防衛活動にあたっていた地域住民ら二十〜三十人が交代で、白根神社上手から富月橋付近の民家までの間でス

クラムを組んだ。土のうや杭を支え、水をせき止めようとすが、水圧はひどく、しっかりと腕を組んでも一人、二人とすーっと坂の下の方へ流されてしまう。流されても、流されてもまた、入れ代わり立ち代わりスクラムを組む。「小さい頃から、泳いで遊んできた中ノ口川。恐いことなんてないさ」。迫り来る水の不安をかき消すように、自らを励まし、みんな腕を組んだ。土のうの代わりに石を詰めた俵を積んだりもした。それでも水は止まらない。

橋のたもとの家は、壁など柱以外のすべてが流された。「ここで、この柱も流されてしまったら、流れる材木で町の家々が将棋倒しになってしまふ」。濁流に土台を洗われた家をロープでつなぎ、消防団はやっきになって家を支えた。この間、土のう・石俵二千俵が投入され、杭木二百本が打たれた。

この日、当時の市長吉沢正五氏は、公務のために上京していた。中ノ口川増水の知らせは直ちに市長の耳に入った。知らせを聞き、すぐに帰省しようとしたが、交通機関が麻痺し、帰ることはかなわなかった。市長は何度となく対策本部と電話でやりとりを続けた。

午後九時すぎ、怒とうとなって水が流れ込む。懸命の土のう作りも、もはや間に合わなくなっていた。「米俵だ。米俵を持ってこい」。どこからともなくそんな声が上がった。住民らが諏訪木の政府米倉庫前に押し掛けた。米は大切な国民の食糧。それを無断で持ち出されては困る」という政府米倉庫管理人と住民との間のやりとりは続いた。

こうした状況の中、災害対策本部では、最悪の事態である堤防決壊をなんとかしても防ぐために、対策会議で米俵の搬入を決定。直ち